

対話的学び実現のために変わるとよいこと

1 子どもの机、全員前向きの不思議さ

ランドセル商戦が始まる時期、テレビに1年生の教室風景が映し出される。そのすべてが子どもの机を前向きに整然と並べた教室だ。ということは、日本人の教室のイメージはこういうものであり、こういう教室が全国津々浦々に依然として存在していることを表している。実際、「学び合う学び」に取り組んでいる学校でさえそうしている教室がある。正直に言う。私はそれが不思議でならない。

すべての席が前向きに並んでいる場所としてすぐ浮かぶのは劇場とかコンサートホールなどである。そこはなぜそういうふうになっているかと言えば、ステージで行われる演劇や演奏、あるいは講演やトークなどを、客席のすべての人に届けるためである。ここでは、発信するのはステージ上の人物であり、客席にいる大勢の人はすべてその発信を受ける側である。つまり、客席の反応を受けとめた演奏なりトークなりをしているとしても、発信者と受信者の関係はステージからの一方向なのである。

子どもたちが学ぶ教室は、基本的にはそういう場ではない。子どもは単なる受信者ではないからである。もっと厳しく言えば、受信するだけにしてはならない。教師の教えを受けとるだけでは学びは生まれないからである。もちろん、教師が魅力的な発信者となって子どもたちを魅了する時があってもよく、そういう時は机をすべて前向きに並べてもよいだろう。しかし、それは、どちらかと言うと特別な場合であって、通常は、教師と子どもの発信と受信の関係を一方向にしてはならない。

もちろん、前向き机でも、教師から子どもへの一方向だけでなく子どもから教師への発信もできる。しかし、問題は子ども相互の関係だ。前向き机では、子どもがアクティブにかかわり合う関係が脆弱になる。部分的にもなる。だからすべての子どもの学び合いにはならない。教師であればだれでもわかることである。にもかかわらず、相変わらず前向きの並べ方を変えようとしないう体質が存在している。

学ぶという行為は一人だけではまずできない。他者とかかわり、他者と考えを擦り合わせ、他者とともに探究的に考えることで学びは深まる。どう考えてよいのかわからなくなったとき、とんでもない間違いに走り出してしまったとき、だれかのおかげでその窮地を脱するということはよくある。子どもだけのことではない。大人だってそうだ。これまでのことを振り返れば、だれだってそういうことがあったなあと気づくだろう。人が生きる時、そこに必ず他者とかかわりがある。もちろんよいことだけでない。他者との関係でつらい状態に陥ることもある。そうであっても、それを乗り越えるのに必要なのは寄り添ってくれる他者や勇気を与えてくれる他者の存在なのだ。

子どもの学びも同じである。学ぶということは、教師に教えられることを言われるままにやったり、それをそのまま暗記したりすることではない。教師から子どもへの一方向の指導では学びは生まれないのである。学ぶべき対象に、それぞれの子どもが意識的に立ち向かい、自分のなかから自分なりの考えを引きだししていくことで学びは生まれる。つまり、学ぶという行為は子ども一人ひとりの自立的行為なのである。けれ

ども、その自立的行為をすべての子どもが一人で行うことは難しいし、ある程度一人でできたとしてもそれだけでは内容的に浅くなってしまふ。学びは個々の子どもの内に別々に生まれ存在するものだけれど、それを豊かにするには、ともに学ぶ他者が必要なのだ。劇場のような前向きの座席にして、教師の指示に従うだけの教室では、そういう子ども同士のつながりは生まれにくい。互いに向き合うことなく前にいる教師に向けた机の並べ方をしても子どものつながりはつくれると言う人がいるけれど、それは、からだや目の向きを軽く考えているからだ。

コミュニケーションとか対話について書かれた書籍が数多く出版されている。それらは、もちろん、学校教育におけるものだけでなく、すべての人と場に共通するコミュニケーション・対話について記されたものである。そうした本を読んでもみると、人と人が対話するときのからだや目の向きについて記されていることに気がつく。たとえば、伝統的な文学形式である「連歌」を行うとき、その座った形が互いからだを向け合う円座になっていて、人は昔からからだを向け合って対話してきたのだとか、目と目が合うアイコンタクトが重要だとか述べられている。

よくよく考えてみれば、書籍に書かれているからということだけでなく、だれだって、大切な相手と真摯に語り聴き合おうとするとき、あたり前のようにからだを向け合っている。視線を交えない関係では、気持ちのすれ違いが起きてしまう。どこを向いていても気持ちが向き合っていればよいのではないかと考える人は、からだと内面との関係、からだと対話の関係を安易に考えているのではないだろうか。からだ向き合っていないときに交わされる言葉は、学びを深める誠実で真摯な対話にはならないのだ。

対話を学級全員という多人数で行うことは難しい。『「学び合う教室文化」をすべての教室に』（世織書房）の著者・古屋和久さんの教室は一日中グループだそうだ。それは古屋さんが学び合いは授業の一方法ではなく文化だと考えているからだ。もちろん、全員での学び合いもあるのだからそういう時はコの字に机を並べるといふ教師もいる。多人数であっても、子どもと子どもの間に対話的な双方向性が生まれるようにしているのである。だから当然、子どもたちのからだや目は、一律に黒板の前にいる教師に向けられる状態にはならない。ひとは、遠い昔から、そして今でも、クリエイティブなことに真摯に向き合うとき、大切なことを相談するとき、互いのからだを向かい合わせにして、アイコンタクトをとる対話が必要なのだ。これは自明のことである。

机の並べ方についても一つ忘れてはならないことがある。それは子ども同士のつながりがなければ安心して学ぶことはできない子どもがいるということである。特に、小学校低学年において顕著である。

じっとしてられない子ども、絶えずからだをぐにゃぐにゃさせている子ども、教師の話聴こうとしない子ども、友だちと同じことがずっと始められない子ども、そういう子どもがいる。中には、坐っていらなくて、立ち歩いたり、教室から出て行こうとしたりする子どももいる。そういう子どもに対して教師は懸命にかかわっている。けれども苦勞の割には子どもの状態が変わらないことが多い。

あるベテラン教師がそういう子どもが何人もいる学級を担任して苦勞していた。それが、あることを契機にほとんどの子どもの落ち着きが生まれた。それは劇的とも言える変化だった。その教師がしたこと、それは、どんなときでも、ペアの相手と二人で学習するということだった。もちろん、教師は、ペアによる学びを深く支えるようにし、どのペアがどのようにしているかがだれからも見えるように向かい合わせのコの字型の机の並べ方にした。こうして、この教室にはひとりぼっちになっている子どもは一人もいなくなった。どの子どもにも、自分に向き合い、自分に視線を向けてくれる友だちがいる、そのつながり感がすべての子どもの気持ちを安定させたのだ。

子どもたちの心の安定、学びへの意欲、それは、教師とのかかわりとともに、仲間とのつながりで確かなものになる。どれだけ教師が子どもたちにかかわっても、それだけで本当には子どもは変わらない。子どもと子どものつながりに、寄り添い合いと支え合いと学び合いが生まれたとき、子どもはその教室で生活すること、学ぶことに安心感と期待感を抱くようになる。

そんな教室は、どの子どもの視線も教師にだけ向けられている教室ではない。子どもと子どもがからだを向け合い、気持ちを向け合い、わからなさも自分にはない考えも尊重しそこから学び合う、そういうつながりに満ちている。

子どもにとって必要なのは、子どもと子どものあいだのそういうつながりなのだ。そのつながりに代わるものは、どんなに努力しても教師では生み出せない。それほど子どもと子どものつながりで生まれるものは子どもの心に響くのだ。にもかかわらず、子どもと子どもをつなぐことにそれほど心を砕かない教師がいる。そしていつまでたっても教師に向けて机を並べさせている。中には、一人で頑張れる子どもにすると行って一人ひとりをバラバラに座らせている教師もいる。

前向き机の並べ方を絶対視することから日本の学校はどうして抜け出せないのだろう。私の考えは特殊なものでも、突飛なものでもない。だれだって対話をするときはからだや目を向け合っているのに、どうしていつまでたっても教室の風景が変わらないのだろう。本当に不思議でならない。

2 校内研修における指導案検討の不可解さ

授業研究は、日本の学校が行っている世界に誇る伝統的な学校文化である。学校が創設された明治以来、授業をよくするために教師たちが綿々と続けてきたという持続性はもちろん、その伝統が日本のどこに行っても行われているという広域性も素晴らしいことである。

しかし、その中身に関しては、「主体的・対話的で深い学び」への転換が強調された現在、大事な転換点にきている。それは、一言で言えば、「教える授業」から「子どもが探究する学び」に転換する教育のあり方に沿ったものにするためである。

私がかかわる学校では、着実にこの転換が行われつつある。

何よりも変化したのは、教師の指導法に特化した検討ではなく、子どもの学びの事実を大切に検証するようになってきたことである。学ぶのは子どもなのだから、教師がどう指導するかの前に、子どもの学びがどうだったかを見なければいけないというのは当然のことである。授業の後の研究協議会で教師たちが語り聴き合うことは、どこで学びが生まれたか、それはどういう意味でよいと思ったのか、子ども同士の学びのつながりはどういうつながりだったか、その結果どのように学びが深まったか、逆に、どこで学びが停滞したか、停滞の原因は何だったと思うか、といった子どもの事実の丁寧なふり返りでなければならない。教師の指導については、こうした子どもの事実の中からすがたを現す。つまり、子どもの学びを深める教師の指導は、子どもの学びがどうだったかを見直すことからしか検討することはできないということなのだ。

この考え方の転換に反論はほとんどない。学ぶのは子どもであり、教師は子どもの学びを深めるために授業をするのだから、子どもの事実をないがしろにした指導法の検討など意味がないとわかっているからである。しかし、子どもの事実をみるということは簡単なことではない。子どもは何人もいて、どう学んでいるか、どう考えているか、どこでつまづいているかは一人ひとりみな異なるからである。そして、その一人ひとりの事実が子ども間でどうつながっているのかつながっていないのかも検討しなければならない。さらに子どもの事実には常に教材の内容・価値とつながっていて、そのつながりをとらえるということが一筋縄にはいかない。だから、いま、教師たちは、子どもの事実をみるということの難しさと奥深さに直面している

と言える。それは教師にとって授業づくりの「壁」である。ただ、この「壁」を認識できたこと、そしてそれを超えたいと思うようになったことが素晴らしい。そうした営み、取り組みによって、子どもたちの学びの深まりが生まれると思うからである。

教師の指導法よりも子どもの学びを大切にすることに関して、もう一つ、見直さなければならないことがある。しかも、それは日本の多くの学校で、あたり前のようにやられてきたことである。

ほとんどの学校で行われている校内研修（現職研修とも言う）で、年に複数回、全校職員が参観する授業研究会が行われている。その際、その授業を授業者一人に任せてしまうのではなく、周りの教師たちで支えるようにしている学校が多い。こういう授業研究は、授業者個人の授業診断にするのではなく、参観するすべての教師も含めた研修にすべきだから、学校としてのそういう取り組みは好ましいことだと言える。

しかし、やってはいけないことがある。それは、公開する授業のデザインをみんながかりで議論する指導案検討である。もちろん作成そのものを大勢で議論して行うということは決してやってはならないことである。授業は、唯一無二の学級において、唯一無二の教師が行う、唯一無二の行為である。だから、学級の状態、子ども一人ひとりのことをだれよりもよくわかっている授業者しかデザインすることはできない。仮に、他の教師が「こうしたほうがよい」と助言？したとしよう。それは、助言をした教師の考えであり、授業をする学級の子どものことを深く勘案してのものではない可能性が高い。

繰り返して言うが、いま、大切にされているのは「子どもの学び」である。その子どもは学級によってすべて異なる。だから、同じ教材で授業しても、共通するところもあるだろうけれど、同じになるはずがない。それは教師ならだれもが実感していることである。授業にはシナリオはない。想定通りには進まない。瞬間瞬間に生まれる子どもの事実即して、学びが深まるように手を打つ教師の即興的判断による創造的な行為である。そういう授業のデザインを何人もの教師によって作り上げるなどということはあってはならないことである。そうしてしまったら、その学級の子どもの状況に合わなくなるだけでなく、教師の手順や考えに子どもを封じ込めるといってもっともよくない結果を生んでしまう。

授業をする教師を支えようという職員間の協同性はよいことである。それがなければ校内研修の雰囲気は前向きにはならない。しかし、やらなければいけないことは何なのかということについて深く考えないと、かえって授業をする教師を困らせ、混乱させ、ひいては子どもの学びを滞らせてしまう。

周りの教師がかかわってよいのは、まず、教材研究である。授業をする教師の教材に対する認識が深まるように、本気になってともに考えるようにしたほうがよい。授業日までには、その教師の授業を参観し、子どもと教師のやりとりに対して、よかったこと、見直すとよいことなどを事実即してコメントするのもよいことである。自分がどう授業しているかは自分では見えないのだから、それは授業者のプラスになる。きっと研究授業日まで改善が図れるように取り組めるだろう。

そういう支援を受けて授業者は授業デザインを考えるのだが、厳しいようだけれどそれは自分でやらなければならない。だれかに作成してもらうことはできない。ただ、困ったことやわからないこと、不安なことが出てきたら、「この人」と思う人に自ら相談するとよい。それは、校内研修のシステムとして行うのではなく、授業者本人の意思と自発性によるものだから、そこで得たものは自らのものにしていくことができるだろう。周りの教師にとって大切なのは厳しさに挑むその教師を温かく見守り求めに応じて支えることである。そして、もっとも大切なのは、授業後に、行われた授業に対して、誠実に、温かく、それでいて真摯にコメントすることである。その際、その授業から自らも学ぼうとすることである。そういう教師間のつながりこそがもっとも心強い「支え」になる。